

第10回IIBCエッセイコンテストで2名の受賞者を出した東京都立小石川中等教育学校。 受賞した2人の生徒と中田先生に英語の学習についてうかがいました。



東京都立小石川中等教育学校
中田 淳予 先生
星見 友香 さん
呉 悠 さん

— エッセイコンテストに応募したきっかけと、 今回、受賞したエッセイについて教えてください。

中田先生:本校は中高一貫校で、中学生にあたる前期課程3年間と、高校生にあたる後期課程3年間の6年制の学校です。一般的に、高校1年生は新しい環境に慣れることで一年が過ぎていってしまいがちですが、本校では中高一貫校である利点を活かして、後期課程が始まる4年生は3年生までに積み上げてきた力を校内外で発揮する「飛躍の年」とらえています。英語科でも校外での活動に積極的に挑戦してほしいと思い、4年生の生徒たちが活躍できる場を見つけるために、英語の大会やコンテストに広くアンテナをはっています。その中で、IIBCエッセイコンテストが時期的にも夏休みの課題としてちょうどよいと思い、選択課題の一つとして提案しました。

星見さん:夏休みの宿題として中田先生からこのコンテストを教えてもらった時、1年生から学校の課題として定期的に取り組んできた英語のエッセイを、学校の外で発表するという事に挑戦してみたいと思い応募しました。今回のエッセイは、幼稚園の同級生だった障害を持つ友人との再会によって、意識をしないうちに生まれてしまう偏見があることに気づきました。その壁を取り除くことで、宗教、思想、文化の違いを乗り越えて世界を広げていくことができると考えたことについて書きました。

呉さん:私は日本で生まれ育った中国人です。日本では私自身が「外国人」であり、今回のテーマである「異文化」にふだんから興味を持っていました。そんな自分の思いを英語の文章にまとめて発表することで、多くの人に知ってもらいたいと思い応募しました。今回のエッセイは、日本と中国の二つの文化を持っていることで、自分のアイデンティティを見つけられずにいた私が、さまざまな文化を持つ人々が暮らすオーストラリアでの経験を通して、文化は違っても自分の立場に誇りを持って、お互いに理解しあおうとすることが大切だということを知ったという内容です。

— 英語のライティングは、 普段どのように勉強していますか？

星見さん:学校の授業でライティングに取り組む機会が多いです。1年生から英語の宿題として週1回ほど300語くらいのエッセイを書いてきました。最初は難しかったのですが、4年生まで続けてきたことでエッセイを書くことに対する抵抗はなくなってきました。

呉さん:私も授業でやってきたことが英語のライティングの役に立っていると思います。とくに宿題で書いたエッセイは、ネイティブの先生が毎回添削してくださるので、とてもありがたいです。

中田先生:エッセイライティングについては、英語を習い始める1年次で、基本的な書き方を指導し、定期的に課題を出しています。4年生になるまでに50本ほどの短いエッセイを書いたこととなります。エッセイのトピックは、基本的には授業で扱うリーディング素材に関するものです。普段の授業では、英語の4技能をできるだけバランスよく伸ばしてあげたいという思いがあります。ある素材を聞いただけ、あるいは読んだだけで終わらせると流れていってしまうので、一回の授業で、まずは「聞く」、次に「読む」、そして「話す」、最後に「書く」ことを着地点にするというサイクルを作っています。この「書く」部分でエッセイを取り入れて、添削して生徒に返すまでが一連の流れになります。

星見さん:エッセイを書き始めた頃は、日記や学校の行事の感想など簡単なものでしたが、3年生になると死刑の是非についてとか、テクノロジーについてなど、だんだんと日本語で書いても難しいようなテーマがトピックになりました。私は難しいトピックの時は、まず調べたことを日本語で箇条書きや簡単な図にしてから英語でまとめていくという形で進めています。

呉さん:1年生からエッセイに取り組んできて、日記や感想なら英語で書けるようになりました。トピック自体が難しい時は、日本語と英語の両方でトピックについて調べてから英語でまとめるようにしています。4年生からは、あるトピックについて3分間でできるだけ多くの文章を書くという学習方法も習いましたが、これも役立っていると思います。



— 今回のエッセイを書くにあたって難しかったことや、 受賞された感想を教えてください。

星見さん:小石川フィロソフィーという選択式授業では、海外交流の授業を選択していて、オンラインでアメリカ、カンボジア、インドなど様々な国の高校生と交流したり、意見交換をしたりしています。それが今すごく楽しくて英語は好きな科目ですが、得意かと言われると自信がありませんでした。今回のエッセイコンテストも最初はワード数が500語以上と長いので身構えていました。ところが、考えているうちに伝えたいことがたくさん出てきて、わかりやすくまとめる作業が大変になりました。1つのエッセイを書き上げたことは自信にはなりましたが、今回、受賞したと聞いた時は「まさか自分が」と驚きました。

呉さん:もともと英語は好きな科目で、検定等にも積極的に挑戦しています。日頃から自分自身が「異文化」であると感じていたので、今回のエッセイの「私を変えた身近な異文化」というテーマを見た瞬間に書きたい内容が頭に浮かびました。でも、500語以上の長いエッセイを書くのは初めてで、英語で自分の考えを正確に伝えることの難しさを感じました。より伝わりやすい文章になるように、なるべくシンプルな表現を使って書くことを心掛けました。今回、賞をいただいたことで自分の強い思いを伝えることができた実感し、とてもうれしかったです。

中田先生:このコンテストのエッセイを夏休みの選択課題にしたところ、4年生160人のうち約100人分のエッセイが集まりました。始業式に回収してからメチャまで数日しかなかったので、選考だけでも時間がかかり、添削はグラマーチェック程度しかしていません。今回の作品は2人がそれぞれ自分の感性で仕上げたものです。校内選考で100作品から2作品を選ぶのは大変でしたが、この2人の作品は、自分にとっての異文化という独自の視点で、自分の内面の葛藤や成長といったものを瑞々しく書くことができていて、きらりと光るものがありました。自信を持って選びましたが、2作品とも受賞したと聞いた時は、本当に感動しました。努力が報われたと感じるとともに、外部で客観的な評価をされるという経験は、2人にとって大きな成功体験になったと思います。

— IIBCエッセイコンテストに応募して、 よかったことはどんなことですか？

星見さん:自分が考えていることを人に伝えるために文章にすることで、自分の考えがまとまるという面もあったので、書くことの大切さを学ぶことができました。また、授賞式に参加させてもらった際は、トップレベルの高校の生徒や留学を経験した人も多く、校内だけでは気づかないことも校外の人とのコミュニケーションで気づくことができ、とてもよい刺激になりました。さらに、副賞のAFS短期留学でフィリピンでの語学研修とボランティアをさせていただくことになりました。この機会を活かして、受け身にならず、現地の方たちと英語で話したり触れ合ったりしたいと思っています。

呉さん:私は英語の文章にまとめることで、心の中だけにとどめていた思いが整理されて自分の意思がより明確になり、「次は行動してみよう」と、次の一步につながるきっかけになりました。実際にこのエッセイに挑戦した後、英語のフォーラムやディベートコンテストなど、様々なことに挑戦しています。これからもいろいろ挑戦して、ライティングはもちろん苦手なスピーキングもブラッシュアップしていきたいです。授賞式で会った他校の受賞者は、みなさん国際社会に対する意識が高い人ばかりだったので、とても刺激を受けました。

中田先生:今回、2人が受賞したことは、同級生によい刺激を与えるきっかけにもなりました。実は、IIBCエッセイコンテストの他にも、4年生が中心となって意欲的に外部の様々なコンテストや大会に挑戦して入賞するなど活躍しています。このように、同級生が挑戦し結果を出している姿が周りの生徒の励みになり、「自分も挑戦してみよう」「私もがんばりたい」と、生徒たちのお互いに高めあえる風土ができています。また、IIBCエッセイコンテストでは、各学校2作品まで応募できる本選以外に、団体で応募できる奨励賞の枠があるので、学校代表に選ばれなかった生徒の努力も無駄にならない点がよりよいところだと思います。奨励賞は選考の対象にならないものの、後日、フィードバックをもらうことができます。このフィードバックはとても丁寧なもので、参加した生徒たちの励みになりました。受賞する・しないに関わらず、生徒の成長の場として、非常に有意義な機会になったと思います。

— 「東京グローバル10」指定校ならではの 英語の取り組みについて教えてください。

中田先生:本校は「東京グローバル10」指定校ということで、国際理解教育に力を入れています。3年生全員が参加するオーストラリア語学研修と、5年生全員が参加するシンガポール海外修学旅行を大きな2つの柱として、帰国後の成果発表や、現地で行うプレゼンテーションなどの準備を年間を通して進めています。また、海外の提携校からの生徒も年間を通じて受け入れており、さまざまな国の生徒と交流があります。英語科でも外国人の教員が複数名在籍していて、個別にライティングの添削をする時間をとったり、わからないことがあればすぐ質問できたりするので、生徒にとっても心強い存在となっています。



— 「小石川フィロソフィー」とは、どんな授業ですか？

中田先生:小石川フィロソフィーは課題研究の選択式授業です。各教科を担当する教員がそれぞれ独自の講座を開き、現在は文系から理数系、社会系まで12講座あり、幅広い選択をすることができます。英語科では私が担当するディベート講座と、別の教員が担当する海外交流の2つの講座があります。星見さんは、海外交流の講座を選択しています。呉さんは数学の講座をとっているのですが、英語が得意なのでディベート講座の生徒に誘われて課外でディベートの活動もしています。

— 英語の4技能が求められる中で、 英語を指導する際に心掛けていることは？

中田先生:「英語を使う」訓練という意味では、生徒が思考して発話するための枠組みとして、ディベートが有効だと感じています。社会的なトピックを扱うことでリサーチする力がつきますし、制限時間の中で自分の意見を伝えるために考える力が必要になります。さらに、肯定側と否定側にわかれて意見を交換するディベートでは、自分の意見を述べるだけでなく、相手の意見に傾聴して理解することができるとキャッチボールになりません。この「聞く力」こそが、これからの時代にも求められる力だと思います。後期課程では、単に英語を話せればよいということではなく、ディベートという枠組みの中で、聞く力を鍛え意見のやりとりをする訓練にどんどん取り組んでいきたいと思っています。

— 星見さん、呉さんの将来の夢を教えてください。

星見さん:私は子どもの教育に興味を持っています。AFS短期留学でのフィリピンのボランティアもストリートチルドレンなど貧困層の子どもたちへの教育的サポートが含まれています。そのような経験の中で、子どもの教育に関わる仕事でやりたいことが見つけていきたいと思っています。

呉さん:将来なりたい職業は、まだ具体的には決まっていないのですが、今、グローバル化やIT化が注目されていて、これからは今までにない職業も生まれてくると思います。そういった動きにも柔軟に対応できる国際人になりたいです。

IIBCエッセイコンテストを活用したライティングの授業を行なっている不二聖心女子学院。その具体的な授業の様子を望月先生と3名の生徒からうかがいました。



不二聖心女子学院(静岡県)

久富 穂佳 さん(左から順)
望月 美代乃 先生
宮下 あかり さん
加藤 直 さん

— なぜIIBCエッセイコンテストを授業に取り入れたのでしょうか？

望月先生: 当校の英語の授業では“書く”という作業を非常に大切にしており、2年生からライティングの授業を展開しています。生徒には短いエッセイから英文を書くことに慣れてもらいます。そのステップを踏まえた上で、3年生で複数のパラグラフのライティングに進みます。この3年生の授業の中で、数年前から同エッセイコンテストを活用しています。海外の文化に関心を持っている生徒が多いため、エッセイコンテストで毎回掲げられるグローバルな視点のテーマも、授業で取り上げるトピックとして有意義であると感じています。



— 授業の様子を詳しくお聞かせください。

望月先生: エッセイコンテストの授業には5時間を費やしており、教師はイギリス出身のネイティブの先生と私の2人体制です。1時間目はコンテストのテーマを読み解く時間です。昨年は「私を変えた身近な異文化体験」がテーマだったので、4人程のグループで異文化体験についてプレーストーミングする時間を取りました。このグループワークで考察をシェアすることで、自分一人では到達できなかったポイントに気付かせることがねらいです。2時間目は、エッセイの構成を組み立てる個人作業を行います。私は、このプランニングの段階が一番重要だと思っています。いわゆる日本語的な思考回路になっている生徒がほとんどなので、英語的な論理の流れになっているか、どのように

て英語的脈絡にまとめればいいのか、ということと一緒に考えます。そして3時間目から、いよいよエッセイを書き始めます。時間がかかるのは承知していますが、生徒にはあえて授業中にエッセイを仕上げるように指導しています。またクラスで添削をシェアすることで、他の生徒の間違いからエッセイのテクニックを学ぶことも大切だと認識しています。5時間目以降は個別にメールでやりとりをし、やる気のある生徒は修正を重ね、納得するまで書き直してエッセイを完成させます。

1時間目	グループワーク(テーマについてディスカッション)
2時間目	プランニング(エッセイ構成を組み立てる個人作業)
3・4時間目	授業中にエッセイを書く 添削してクラスでシェア→テクニックの共有
5時間目~	メールでのやりとり・納得するまでやり直しをし、エッセイの完成

— 授業を通じて感じた生徒の変化はありますか？

望月先生: はじめは500~700ワードという長さで戸惑う生徒も多いですが、一度書き切ることによって自信が付き、長文エッセイを恐れなくなってくるように見受けられます。これからさらに国際化が進み、様々な文化背景を持つ人々との交流が増えていく中、自分の意見をはっきりと述べる姿勢は重要です。英文でエッセイを書くことで、論理的に思考を組み立てる訓練をし、社会の中で活かして欲しいと思います。

— エッセイコンテストの授業で得たもの、感じたことはありますか？

宮下さん: エッセイを書く授業では、自分の持っている知識自体を試されていると感じました。例えば社会問題などについて、自分の考えを時間内にまとめて書かなければなりません。そうすると、日頃から時事問題などに関心を寄せていなければ良いエッセイを書くことができないので、社会的な動きについても意識を向けるようになりました。



加藤さん: 授業を通して、英語のエッセイは国語の作文とは異なるのだと学びました。きちんと論理立てて自分の主張を伝えた上で、クリエイティブに仕上げなければなりません。ネイティブの先生に、日本人とは違う観点から指摘をいただけたのも良かったです。

久富さん: 他の授業では生徒は先生の話や聞き手など受け身であることが多いですが、エッセイコンテストの授業は「私を変えた身近な異文化体験」というテーマについて自分自身で考え、意見を述べるすることができます。アクティブで貴重な時間でした。

— エッセイコンテストに参加して起きた自分自身の変化はありますか？

宮下さん: 今までワンパラグラフのエッセイしか書いたことがなかったのですが、長文に挑戦したことで、自分に自信ができました。もっと上を目指したい、と思えるようになりました。

加藤さん: 授業での学びがきっかけとなり、個人研究のレポートを英語で書くことに挑戦しました。

久富さん: もっと難しい文章や、熟達した英語も書いてみたいと思うようになりました。

— 将来の目標を教えてください。

宮下さん: まだ明確な目標は決まっていますが、進学先の大学ではアジアを中心に研究したいと思っています。アジア各国も当たり前のように英語を話す時代なので、英語をツールとしてアジア全体とコミュニケーションを図り、情報交換をしていきたいです。

加藤さん: 日本、また自分という存在についてより深く理解するためには、他国の文化や思想との比較をすることが不可欠です。世界中の様々な情報を英語で取り込みながら、英語での意見発信も行い、自分自身を磨いていきたいです。



久富さん: 将来は、世界中を飛び回るパイヤーになるのが夢です。グローバルに活躍する女性を目指し、これからも英語を勉強していきたいと思っています。



第9回 IIBC エッセイコンテスト 日米協会会長賞受賞 宮下あかりさん インタビュー

• 受賞の感想

受賞の知らせを聞いた時はとても驚きましたが、今まで積み重ねてきた努力がこのような形で実り、とても嬉しく思います。大学に進学しても、引き続き英語を勉強していきたいと改めて思いました。表彰式では他の受賞者たちと意見交換することができました。異なる環境に暮らす同世代の仲間からたくさんの刺激をいただき、貴重な経験をさせていただきました。

• 授業のどのようなところが受賞につながったと思いますか？

1時間目のグループセッションで意見交換する時間を取っていただいたことで、より良いエッセイを書くことができたと思います。また先生がエッセイを添削し、その都度ABC評価をつけて戻してくれたので、だんだんと評価が上がっていくことに達成感を感じ、やりがいが見出せました。エッセイは“英語的な型”にはめるとも重要だと思うのですが、アイデアのまとめ方のコツも、だんだんと掴めるようになってきたと思います。

第7回エッセイコンテストで最優秀賞を受賞した三田さんと指導教授の原口先生に、応募のきっかけやエッセイコンテストを通じた成長体験についてうかがいました。



— エッセイコンテストに応募したきっかけを教えてください。

三田さん:授業中に原口先生からエッセイコンテストの事を教えてもらったのですが、特に気に留めていませんでした。しかし、夏休みに入った時に、ふとコンテストのことを思い出し、時間ができたのでせっかくなら何かにチャレンジしてみたいと思い、応募を決めました。

私は親の仕事の関係で4歳から14歳までをアメリカで過ごしました。エッセイのテーマに掲げた「日本とアメリカの教育の違い」については、家族間でも日頃からよく話していたことです。エッセイで伝えたいことは、はじめから決まっていた。ただアメリカに居た頃の記憶は曖昧な部分も多く、まず家族から話を聞き、忘れていたエピソードを思い出す作業からスタートし、自分の意見と書きたい内容をしっかり整理したうえで書き始めました。一度全て書き上げてから先生に添削をしていただき、ブラッシュアップをして仕上げました。



— エッセイコンテストの経験を通じて自分自身の成長や変化などを感じましたか？

三田さん:私は今までコンテストなどに特別興味はありませんでしたが、エッセイコンテストへの応募がきっかけとなり、高専の仲間と英語のプレゼンテーションコンテストにも出場しました。エッセイコンテストで最優秀賞を受賞したことで、自分の英語に自信が持てるようになり、前向きなチャレンジ精神が芽生えたのだと思います。また今後は、エッセイコンテストを通じて得たことや感じたことを、アウトプットしていきたいと思っています。日本人は英語に苦手意識を持っている人も多いですが、自分の意見を英語で発言したり、コミュニケーションを取ることは、実はそんなに

難しいことではありません。意思疎通の方法は色々あるんだよ、ということを多くの人に伝えていきたいと思います。

—これからエッセイコンテストに挑戦する人へのアドバイスやヒントを教えてください。

三田さん:エッセイを書くためには、リスニングとリーディングの勉強が特に大切だと思います。自分の言いたいことをきちんと表現するためには、ある程度の知識や単語力が必要になるからです。特にリスニングは、ネイティブならではの表現を知るきっかけにもなります。それをエッセイに盛り込むことで、自分の意見をよりクリアに伝えることができるはずですよ。また、自分の意見を遠慮せずに人に話すことも、エッセイの論理立てをするための大切な訓練になると思います。

—AFS留学制度を利用した感想を教えてください。

三田さん:ドイツ、カナダ、イタリアなど、色々な国の人と交流を持つことができ刺激を受けました。彼らは、日本にいる同世代よりも、政治や国の内情に関心を持っています。ある日ドイツ人の友人から、「日本の政治はどんな感じなの？」と聞かれてびっくりしました。改めて日本の政治を勉強するきっかけにもなりました。



—学生に応募をすすめる意義やねらいは何でしょうか？

原口先生:学生にとってエッセイコンテストに応募することは、自分の新たな側面を発見することに繋がると思います。三田君の場合は、幼少の頃を振り返り文字に起こすことで、過去の自分と今の自分とを照らし合わせ、自身の成長に気付けたのではないのでしょうか。そういった気づきや学びの瞬間に、私が教員として付き合えるということは、大変な喜びです。学生と思想や考え方をキャッチボールできる、そして成長を見守っていけることは、とても幸せなことだと思います。また、自発的な意思で自分の意見をまとめ、他人に伝えようと努力することは、今まさに求められているアクティブな学習だと感じています。発信力の強化など、これからの時代に必要なスキルを学ぶための、とても大切な機会になるのではないのでしょうか。

—他の学生への影響はありますか？

原口先生:同じ教室に、コンテストにチャレンジしている学生がいるということは、他のクラスメイトにもいい刺激を与えていると感じます。頑張っている仲間の姿を励みに、高専の学生によくある、「英語が苦手」という思い込みを少しでもなくし、英語を好きになってほしいですね。

第1回エッセイコンテストより審査員を務める立教大学 松本茂先生に、 応募作品の審査におけるポイントや英語でエッセイを書く意義についてお話をうかがいました。



立教大学 経営学部 国際経営学科
教授・BBL主査
グローバル教育センター長
松本 茂 先生

— 審査をする際に大切にしているポイントを教えてください。

松本先生: 一番は構成です。英語の語彙や文法などももちろん大切ですが、それよりもエッセイ全体の流れに注目しています。文脈に違和感がなく、ストンと落ちる内容になっているか。オリジナリティがあり、心に響くポイントがあるかどうか。オリジナリティといっても、何も特別な体験が必要なのではありません。一般的な出来事であっても、そこに新しい解釈を見出して提示してくれたら良いのです。みんなが“当たり前”だと思っ過ぎてしていることを、“当たり前ではない”として提起する。それは面白い試みです。そういった独白性が、読む人の心を打つのだと思います。

— 応募作品をさらに良くするためのアドバイスがあれば教えてください。

松本先生: 1回読んだだけで何を主張したいかがわかる論理構成になっているということが、まず最低限のルールです。そこに、独自のエッセンスがちりばめられているということ。エッセイは、基本的には論証文です。ですから構成は、「序論」「本論」「結論」の流れで進めないといけません。まず、このエッセイにおいて何を主張するのかを述べ、次にその理由を書く。その中でサポートのマテリアルを入れ、結論で締めるといったのが基本的な流れになります。この流れで構成されていないと、結局何が言いたいかわからない文章になってしまいます。半ばまで読んでも意味が分からないようでは、エッセイとしては成り立っていません。具体的には、まず“こう思う”という主張・結論を先に述べ、最初のパラグラフを読んだ時点で、ある程度その後の予測がつく構成にしましょう。次に自分の体験だけではなく、一般的な例をリサーチして盛り込みます。テーマが社会的な問題であればデータや専門家の意見を引用するなど、客観的なデータがあると説得力が増します。エッセイでは、論理と感情のバランスが大切で、心が強くなりすぎたはいけません。もちろん、バラエティに富んだエピソードがあった方が面白いかもしれませんが、メインは論理

を作ることです。結婚式などの特別な場面では“感動”が必要であることもありますが、エッセイでそれをする必要はありません。論理がまっすぐに流れるように書いてください。

— 高校生がエッセイを書くことや英語で書くことの意義を教えてください。

松本先生: 論理的なエッセイの書き方が身につけば、大学入試や大学の講義でも十分力を発揮出来るはず。大学入試での作文は長くても100ワードくらいの出題ですが、その評価項目も論理がきちんと流れているかがメインになります。また、社会に出たときに求められるのは論理的視点ですから、大学でもそこを重要視しています。そういった意味で、高校生がエッセイを書くことは非常に有意義であると思います。次に英語で書くことについてですが、英文を書くということは、英語を話す訓練に繋がります。実際に書いてみると、スペリングが分からなかったり、接続詞で迷ったりしてその都度調べるようになるので、英語の正確さもアップしていきます。しかし、もともとある和文を英文に書き直す作業だけを繰り返しても、一向に自分の考えを表現できるようになりません。ですから、毎日自分の意見を英語で書くと良いと思います。40~50ワード程度の短いもので構いません。毎週テーマをもって、例えば「スポーツ」であれば、1週間毎日違うスポーツについて書く。そこで構成力も養われますし、書き続けていけばスピードも速くなってきます。もちろん最初は全く書けないかもしれませんが、それで良いのです。“書きたいことが書けない”という体験をすると、自分には何が足りないのかということに注目するようになり、学習時の意識が変わっていきます。

— 身につけた英語をどう活用してほしいですか？

松本先生: 最近では法律・会計事務所などでも英語を必要としていますし、新人研修の講師が全員外国人ということもあるようです。今後、英語が出来る人と出来ない人の差はますます開いてしまうでしょう。そういう時代ですから、逆に言えば英語が出来るというだけで、大きなチャンスを掴めます。どんな仕事においても、確実に可能性が広がりますから、目指す分野に関係なく英語を身につけ、自分の将来にうまく活かして欲しいと思います。

— エッセイコンテストに参加する高校生にメッセージをお願いします。

松本先生: 語学習得においては特に、いかにモチベーションをキープするかが重要になってきます。そしてそのためには、色々な目標を作ることが大切です。ただ単純に英語を読んだり聞いたりする学習だけでなく、実践の場で自分の力をどんどん試してみたいと思います。TOEIC Programなどの試験を受けるのと同じように、エッセイコンテストも目標のひとつとして捉え、挑戦してみてください。

● 小石川中等学校のインタビューをIIBC公式サイトに掲載しています。(https://iibc.me/essay_l2)



(本記事の取材は2018年2月に行いました)